

はじめに

小野文

言語研究において「中動」態への目配りは古くから存在する。インドの文法家パーニニ（紀元前四世紀）を脇におくとしても、トラキアのディオニューシオス著『テクネー・グランマティケー』（紀元前二世紀）やアポロニーオス・デュスコロス著『統辞論』（紀元前二—一世紀）等、西洋の文法記述の最初であり後生の規範とされる古典文法書のなかで、中動は「能動」「受動」と並んで定義を受けてきている。しかしこの中動態の初期の記述のなかに、すでに曖昧さが紛れ込んできているという指摘もある。ヤーコプ・ヴッカーナーゲルは『統辞論講義』（一九二六）のなかで、中動態について、「この〔能動／受動の〕図式に入れることのできないものは、中動（情性から作られた用語である）として脇におかれた」と述べているが、ある意味それは正しいだろう。この扱いにくさゆえに、中動態は注目されてきたと言っても過言ではない。

中動態の研究史が重要な変化を遂げるのは、二十世紀に入ってからである。比較言語学の大家アントワーヌ・メイエの下で教えを受けたエミール・パンヴェニストやイエジ・クリウオヴィチらが、ヒッタイト語等の新しい言語資料や、「対立」構造による説明図式というソシユール的手段を用いて、中動への視点を塗り替える。このパンヴェニストの一九五〇年の中動態の定義（それは「能動vs中動」という対立となって現れる）は、「現在でも最も実用的でありつづけている」とゴシツク語の専門家アンドレ・ルソーは確言している⁽³⁾。

ただしこの「実用的」な中動態の記述は、「汎用的」にもなりえる。パンヴェニストの定義以降、後に彼が発展させる問題圏と合わせて、中動態は「人称」や「語り」、あるいは「主体性」の問題とともに哲学・思想の領域で語られるようになってきた。ここでは「中動態」の概念は、主体と周囲の固定した関係性を揺り動かす新しい視座とされる。中動態がとりわけいま、哲学・思想の場で注目を浴びるのは、故なきことではないだろう。自他の関係性が行き詰まりを見せ、相手との距離の取り方が分からない、あるいは相手そのものも見えにくくなっている現在、日本でも、いや世界のどこにおいても、「あいだ」の思考の捉え直しや、自分を動かすものを見つめ直すという反省が起こっているのだと考えられる。

ヨーロッパの思想界においては一九六〇年代後半から、バルトやデリダを始めとする、ポストモダンの思想家たちがこの概念に注目し議論の対象としてきたが、近年ではアガンベンやラトウールが鍵概念として「中動態」を用いている。一方、日本において中動態への注目は二〇一〇年代から

徐々に始まっていたが（木村敏「中動態的自己の病理」〔二〇一〇〕、『あいだと生命』〔二〇一四〕所収、森田亜紀『芸術の中動態』〔二〇一三〕）、二〇一七年の國分功一郎『中動態の世界』の出版で一氣に認知度が高まり、また議論も盛んになっている。⁴一時は様々な思考や現象に「中動態」という概念を適用してみることが硬派なジャーナリズムの書き手の趨向となった感もあった。現在、「中動態」という概念は、日本の思想言論界にある程度の市民権を得た用語となっている。

*

右に記したような著作に刺激を受けて、あるいはそれ以前から、この論文集の執筆者たちは「中動態」概念に興味を持っており、あるときそれが共通の話題になったことから、バンヴェニスト研究者である小野の呼びかけにより「中動態研究会」が立ち上がった。本書の目次を一瞥すると分かるように、執筆者の研究領域は、言語思想史、言語学、哲学、心理学、文学と多岐にわたり、一見分析対象や研究の方向性にも重なるところは殆どないように見える。同じ時期に、ある程度顔なじみの者が集まったとはいえ、それぞれの中動態の捉え方も違っていた。「私の話している中動態は、あなたの思っている中動態と別物だ」と感じるときは多々あったと告白しよう。それにもかかわらず共同研究を続けられたのには、複数の理由が考えられるだろうが、最も大きな理由は、中動態という「躓きの石」がもつ不思議な求心力だったと言えるだろうか。一人ひとりが「中動態」という

概念を、良い意味で看過できないと感じ、これに向き合う必要性を認めたのだともいえる。自らの中動態の思考をもっと深く、もっと遠くへと押しやるために、異質な研究分野にも足を踏み入れてみるのだが、この研究会を通じて可能となったのである。

最初は別々の星のうえで存在しているように思われた研究であるが、その星々は、いくつかのシグナルを外に向けて送っていた。そのシグナルに気付き、いくつかの点が線になっていったのは、数回の勉強会で発表しあい、お互いの研究の距離感がつかみかけた頃だったと思う。その頃、(この論文集にも参加してくれている)郷原佳以氏が『みすず』誌上につづけて連載していた、「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へ——バルト、バンヴェニスト、デリダ^⑤を回し読み、そのなかで触れられている「隠喩としての中動態」という考え方に会うことができた。自分たちの研究会を、厳密に言語学的概念としての「中動態」を中心核として考えるのではなく、「比喩としての中動態」という曖昧で外延のはっきりしないものとしておくことで、しかもそれを肯定的に捉えることで、バラバラに見えていた各研究は、少しずつ「家族的類似性」を見せ始めたといえる。

冒頭に述べたように、言語学における中動態概念は、まずは古典ギリシャ語研究のなかで、その後ラテン語(デポーンネント)、さらにはインド・ヨーロッパ諸言語と言われるヨーロッパの諸言語研究(再帰代名動詞や中動相、中間構文)のなかで培われてきた。すでに古典ギリシャ語においても受動態にとって代われようとしていた「虐げられた態」の感が強い「中動」であるが、それを「能動／中動」の対立において捉え直そうとしたのがバンヴェニストである(小野)。この中動

態はヨーロッパ諸言語に痕跡を残しているが、頭れ方は一様ではないというのが、個別言語研究を通して窺える（北條）。勉強会のなかでは、この「中動態的な言語事象」は、日本語のなかにも見いだせると私たちは考えた。本居春庭の『詞通路』（一八二八）では動詞の自他を論じつつ、自他を二項対立ではなく複層的に捉えようとする考え方がすでに述べられている。この日本語における「自ずから」「然する」という中動態の思考の行方については、本論文集では専門家の研究発表が得られなかったが、東洋と西洋の「思考」と「瞑想」の在り方を考察する際の一つの切り口となりそうである（熊倉）。西洋哲学においては、〈行為者が自らの行為を支配し切れない〉（荒金）という中動態的な世界認識は、「主体・客体」という二項対立の捉え直しを可能にし、近代的自我としての「私」にゆさぶりをかける。一方、バンヴェニストの諸論文に通底する〈ことばにおける主体性の問題〉（小野、郷原）は、言語行為のなかで生起しては変容する「私」という、もう一つの「私」のあり方を提示している。こうした「言語」と「私」の関係をめぐる省察は、当事者性の問題へと繋がり、自閉スペクトラム症など未分化の世界で生きるクライエントの主体生成とそれに対する心理療法のあり方や（藤巻）、想起文学において回想して語る「私」とは誰か、そこから浮かびあがる過去のイメージとは一体誰のものなのか（桑田）といった問題、さらには文学テキストの語りにおける非人称の意味（郷原）を考える際に示唆に富むものとなる。そして、西洋近代が生み出した「私」の幻想をのり越えんとする思考の行き着く先は、究極、〈私は考えない、ゆえに私は存在しない〉（熊倉）ということなのかもしれない。

しかしここに述べた繋がりには、あくまで中動態の拡がりの可能性の一部分であって、読者にはそれぞれ読み方、繋げ方、あるいは切り離し方があると思う。私たちの論者が一つの星座として形を為すかどうかは、読者の判断にまかせたい。

【註】

- (1) 「テクネー・グランマティケー」では、能動態完了形と中動態アオリスト形が並んで例に挙げられている。もう少し時代が下ると、「態」を統辞論的・意味論的に表す「*diathesis*」という用語と、形態論的に表す「*voice*」という用語の二種が混在するようになり、これも態の問題を複雑にしてきた。この混同を指摘し、またアオリストと完了形のもつれをアポローニオス・デュスコロスにまで辿り直す試みに関しては、下記の論考を参照されたい。cf. Marina Benedicti, « Pourquoi l'appelle-t-on moyen ? Apollonius Dyscole et les « figures moyennes » », *Langages*, 194, 2014, p. 9-20.
- (2) Jacob Wackernagel, *Vorlesungen über Syntax*, vol. 1, Basel, E. Birkhäuser & Cie., 1926 (1950²), p. 121.
- (3) André Rousseau, « Propositions pour une description ordonnée des « voix » et des « diathèses » : problématique, statut et conceptualisation du « moyen » », *Langages*, 194, 2014, p. 21-34.
- (4) 國分は二〇二〇年十二月にも熊谷晋一郎と共著で『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』（新曜社）を出している。
- (5) 連載の書誌情報は次の通り。『みずず』二〇一八年十二月号（三〇—三九頁）、二〇一九年四月号（一四—二五頁）、二〇一九年六月号（二六—三七頁）、二〇一九年八月号（二二—二二頁）。